

# オッカムの「個体代示」 suppositio personalis についての解釈

渋谷 克美

筆者は先に、『中世思想研究』第28号書評のなかで、オッカムの個体代示の理論についての、相反する二通りの解釈を紹介した。そこでの論点は以下のように要約される。

(一) Priest と Read の解釈——この解釈は、Ph. Boehner, Kneale, Loux, Spade 等<sup>1)</sup>によっても広く一般的に採用されてきた解釈であり、この解釈の特徴は、「オッカムが三種類の個体代示を下降という論理的概念によって定義した際に、彼は元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値であると考えていた」と解する点である。

Priest と Read, Spade は更に、このような解釈に基づいて、オッカム自身が特称否定命題の述語の代示に関して或る誤りを犯していると主張する。すなわち、オッカムは特称否定命題、例えば「或る人間は白くない」の述語「白い」が配分周延的な不特定共通代示を持つとしているが、これは次の理由から誤りである。もしオッカムの言うように、「白い」が配分周延的な不特定共通代示を持つならば、「或る人間は白くない」という命題と、下降によって形成された「或る人間はこの白いものではない、且つ或る人間はあの白いものではない、且つ……」という連言の命題群とが等値であり、相互に含意できるはずである。然し、

(或る人間は白くない)  $\rightarrow$  {(或る人間は、この白いものではない)  $\wedge$  (或る人間は、あの白いものではない)  $\wedge$  ……}

という推理は成立するが、逆の推理

{(或る人間は、この白いものではない)  $\wedge$  (或る人間は、あの白いものではない)  $\wedge$  ……}  $\rightarrow$  (或る人間は白くない)

は成立しない<sup>2)</sup>。それゆえ、特称否定命題の述語は、配分周延的な不特定共通代示を持

つものではない。むしろ、一括的な不特定共通代示を持つのであって、この点でオッカムは誤りを犯している。

(二) Matthews, Corcoran と Swiniarski, Weidemann の反論——このような解釈に対して、Matthews, Corcoran と Swiniarski, Weidemann 等<sup>3)</sup> は次のように反論する。1) オッカムは彼の三つの論理学書のいずれにおいても、特称否定命題の述語は配分周延的な不特定共通代示を持つと、はっきり述べている。オッカムがうっかり誤ってこの事を述べたとは考え難い。2) むしろ、「オッカムが三つの代示を下降という論理的な概念によって定義した際に、彼は、元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値であると考えた」とする Boehner, Kneale, Loux, Priest と Read 等の解釈のほうに誤っている。すなわち、例えば「白い」という名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つのは、その名辞の概念のうちに含まれる個々のものへと、連言命題を用いて下降することができる場合であるとオッカムが述べた時に、彼が条件として挙げているのは、Priest と Read, Loux 等の解釈のように、元の命題と下降によって形成された諸命題の連言とが等値になり、相互に含意可能であるような下降(……白い……)↔{(……この白いもの……) ∧ (……あの白いもの……) ∧ ……} が成立することではない。単に、(……白い……) → {(……この白いもの……) ∧ (……あの白いもの……) ∧ ……} という下降が成立することだけで充分であって、元の命題と、下降によって形成された諸命題の連言とが等値であり、相互に含意可能である必要はない。それゆえ、特称否定命題の述語が配分周延的な不特定共通代示を持つとするオッカムの説そのものは誤っていない。誤っているのは、Priest と Read 等の解釈のほうである。3) 名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つための条件としてオッカムが挙げているのは、連言命題を用いて下降すること descent to the conjunction が可能なこと (DC と略記) だけではない。更にまた、一つの個別的な単称命題から元の命題へと上昇すること ascent が不可能なこと (～A と略記)、例えば、「この人間が走る、ゆえに、すべての人間が走る」という推理が不可能なことも、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つために必要な条件である。Corcoran と Swiniarski によれば、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つためには、これら二つの条件 DC&～A が成立する必要がある。Kneale, Loux, Priest と Read 等は、この～A という条件を無視している。

(三) Priest と Read の自己弁護——この反論に答えて Priest と Read は或る論

文<sup>4)</sup>のなかで、13世紀初期から14世紀にかけての、代示の理論における「下降」という概念の推移、歴史的発展という面から、彼等の解釈を弁護している。すなわち最初の時期、例えば William of Sherwood のころには下降とは、「すべての人間が走る、ゆえに、この人間が走る」のように、元の命題から一つの単称命題への下降のみが考えられており、上昇も、「この人間が走る、ゆえに、すべての人間が走る」のように、一つの単称命題から元の命題への上昇のみが考えられていた。然し、代示の理論が完成した時期、例えば Albert of Saxony, Paul of Venice<sup>5)</sup> のころには、元の命題と、下降によって形成された全命題群とが等値になるような下降が考えられるようになった。上昇ということが言われる場合でも、それは一つの命題からの上昇ではなく、複数の命題全体から元の命題への上昇が考えられている。オッカムの場合も、彼自身は明確には述べていないが、やはり元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値になるような下降を考えていたのである。更に又、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つために必要なものとして Corcoran と Swiniarski が挙げている、一つの個別的な単称命題から元の命題への上昇が不可能である ( $\sim A$ ) という条件は、オッカムのなかに見出される、古い時代の考えの名残りであって、彼の代示の理論において本質的なものではないし、何ら重要な役割を果たしていない。それゆえ、無視してよい。

以上が『書評』の要約であるが、然しここから、(一)で紹介された Loux, Priest と Read 等の解釈と(二)で紹介された Corcoran と Swiniarski 等の解釈のうち、どちらの解釈が適切であるのか、或いはまた、(三)で紹介された Priest と Read の自己弁護は果たして正当なものであるのか、という新たな問題が生ずる。それゆえ本論では、これらの問題について検討することにした。

## I

先ず第一の、「Priest と Read 等の解釈と、Corcoran と Swiniarski 等の解釈のうち、どちらの解釈が適切であるのか」という問題に関しては、次のように言うことができよう。これまで述べてきたことから明らかなごとく、Priest と Read 等の解釈では、特称否定命題の述語の代示に関してオッカムそのものと矛盾することになる。私が考えるに、このことは彼等の解釈の致命的な欠点なのではないか。何故なら、特称否定命題の述語が一括的な不特定共通代示を持つとする Spade, Priest と Read の解釈は、

単にオッカムのテキストの一節と矛盾するのではない。オッカムの『大論理学』*Summa Logicae*、第一部第七十四章配分周延的な不特定共通代示とその規則<sup>6)</sup>

『第三の規則は次の通りである。主要な結合子 *compositio* (*est* のこと) を限定している否定辞が述語の前に置かれている場合、述語は配分周延的な不特定共通代示を持つ。例えば、「*homo non est animal* 或る人間は動物ではない」という命題において、「動物」という名辞は配分周延的な不特定共通代示を持つのであり、これに対して、「人間」は特定代示を持つ』

からわかるように、オッカムは「否定辞 *non* は名辞に、配分周延的な不特定共通代示を持たせる」*negatio 'non' mobilitat immobilitatum* という論理規則の例として、特称否定命題の述語は配分周延的な不特定共通代示を持つと述べているのである。この規則は、オッカムだけでなく、彼と同時代のパーレーにも<sup>7)</sup> 見られるものであって、中世論理学において極めて一般的な規則である。それゆえ、*Priest* と *Read* 等の解釈は単にオッカムのテキストの一節と矛盾するのではなく、中世論理学において広く一般的に正しいと認められていた論理規則と矛盾するのである。

更にまた、*Alan R. Perreiah*<sup>8)</sup> が指摘するごとく、*Spade*、*Priest* と *Read* の解釈のように特称否定命題の述語が配分周延的な不特定共通代示を持たない、つまり不周延であるとしたら、オッカムの述べている此の論理規則だけでなく、他の多くの論理規則（例えば、换位法の規則のいくつか）も成立しないことになる。それゆえ、もし我々が *Priest* と *Read* 等の解釈を採用するならば、我々は中世論理学全体を大きく変更しなければならないであろう。これは無理である。従って、*Priest* と *Read* 等の解釈よりも、むしろオッカムやその他の論理学者の学説と一致する *Corcoran* と *Swinarski* の解釈を採用するほうが適当である。

## II

更にまた、*Priest* と *Read* の自己弁護が正当なものであるとも思われぬ。名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つ条件について、オッカムは『大論理学』*Summa Logicae* 第一部七十章のなかで<sup>9)</sup>、

条件①連言命題を用いて下降することが可能  
条件②一つの単称命題から元の命題への上昇が不可能

『或る名辞がその概念のうちに多くの個別的なものを含む場合、もし<sup>①</sup>その名辞が何らかの仕方<sup>②</sup>で個別的な個々のものへと連言命題を用いて下降することができ、しかも、その個々のもののいずれからも元の命題が形式的に推理されないとしたら、名辞は配分周延的な不特定共通代示を持つ。例えば、「すべての人間は動物である」という命題において、その命題の主語は配分周延的な不特定共通代示を持つ。なぜなら、「すべての人間は動物である。ゆえに、この人間は動物であり、且つあの人間は動物であり、且つ……」という推理は成立するが、然し誰か或る人を指して、「この人間は動物である。ゆえに、すべての人間は動物である」ということが、形式的に推理されることはないからである』

条件①の例

条件②の例

と述べており、このオッカムのテキストを Loux, Priest と Read<sup>10)</sup> は次のように解釈している。条件①は例から明らかなごとく、例えば「すべての人間は動物である」という命題の主語「人間」のように、その名辞の概念のうちに含まれる個々のもの、この人間、あの人間へと、連言命題を用いて下降できることである。

(すべての人間は動物である) → {(この人間は動物である) ∧ (あの人間は動物である) ∧ ……}

オッカムは、一つの単称命題から元の命題へと上昇できない、条件②を言っているが、然し下降によって形成された連言の単称命題群全体から、元の命題へと上昇すること

{(この人間は動物である) ∧ (あの人間は動物である) ∧ ……} → (すべての人間は動物である)

は当然可能であり<sup>11)</sup>、これを、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つための条件③として付け加える(オッカムのテキストにない条件③の付加)。更にまた、条件②は条件①と③のうちに含まれるから不要である(オッカムのテキストにある条件②の除去)。

かくして、例えば「人間」という名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つための条件は、①と③

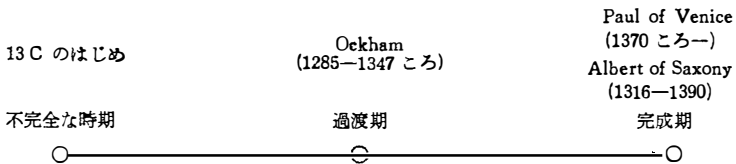
(すべての人間は動物である)  $\overset{\text{等値}}{\longleftrightarrow}$  (この人間は動物である) ∧ (あの人間は動物である) ∧ ……}

が成立することであると主張する。この解釈において、テキストにない条件③を付け加える自らの解釈を弁護して Priest と Read は、「代示の理論が完成した時期、例えば

Albert of Saxony, Paul of Venice のころには、元の命題と、下降によって形成された命題群全体とが等値になるような下降が考えられるようになった。上昇ということが言われる場合でも、それは、一つの単称命題からの上昇ではなく、複数の命題群全体から元の命題への上昇が考えられている。それゆえ、代示の理論の完成への過渡期に属するオッカムのテキストを読む場合にも、たとえ彼自身は明確に述べていないとしても、やはり元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値になるとオッカムは考えていた、と解釈すべきである」と言うのである。

然し、私には、この Priest と Read の主張が正当なものであるとは思われない。確かに Priest と Read が指摘するごとく、William of Sherwood のころには、下降とは一つの単称命題への下降のみが考えられ、上昇も、「この人間が走る、ゆえに、すべての人間が走る」のように、一つの単称命題からの上昇のみが考えられていたのに対して、Paul of Venice のころには、元の命題と下降によって形成された全命題群とが等値になるような下降が考えられるようになり、上昇も、一つの単称命題からの上昇ではなく、複数の命題群全体から元の命題への上昇が考えられている<sup>12)</sup>。この点では、Priest と Read は間違っていない。然し、だからと言って

#### 代示の理論、その完成段階



という図式が成り立ち、それゆえ、オッカムの代示についての記述も、Paul of Venice の考えのように読むべきだ、とは必ずしも言えない。オッカムの代示の理論から、Paul of Venice の代示の理論への移行が、代示の理論の発展、その完成と言えるかどうかは、大いに疑問であり、オッカムのテキストにない条件③を付け加える根拠としては甚だ弱い。

「オッカムから Paul of Venice への移行が代示の理論の発展、その完成と言えるかどうか、疑問である」と私が主張する理由として、次の二つのことを挙げることができよう。①オッカムのテキスト<sup>18)</sup>を読むとそこには、彼が上昇について述べた際に抱いて

いた、或る基本的な考えというものが見出だされる。すなわち、例えば「或る人間が走る」という命題が真であるためには、誰か一人の人間が走っているだけで充分であり、従って、「この人間が走る、ゆえに、或る人間が走る」という、単称命題から元の命題への上昇が可能である。他方、「すべての人間が走る」という命題が真であるためには、誰か一人の人間が走っているだけでは充分でない。従って、「この人間が走る、ゆえに、すべての人間が走る」という、単称命題から元の命題への上昇は不可能である。このオッカムの基本的な考えに基づく限り、上昇とはあくまでも一つの単称命題からの上昇である筈であり、Paul of Venice のごとき、複数の単称命題群全体からの上昇という考えはでてこない。オッカムの基本的な考えと、Paul of Venice の考えは全く異質なものである。②更にまた、Paul of Venice の代示の理論全体という観点からみても、オッカムから Paul of Venice への移行が代示の理論の発展、その完成とは言えない。Paul of Venice の代示の理論は確かに幾つかの点で、オッカムの代示の理論と相違しているが、然しその相違は、オッカムの代示の理論の不充分さを補うといった性質のものではない。

### III

更に、Priest と Read が、オッカムのテキストにある条件②を除去する自らの解釈を弁護して、「一つの単称命題から元の命題への上昇が可能か、否かという条件は、オッカムのなかに見出だされる、古い時代の考えの名残りであって、彼の代示の理論において本質的なものではないし、何ら重要な役割を果たしていない。それゆえ、無視してよい」と述べているのも、正しくない。Priest と Read は、配分周延的な不特定共通代示だけでなく、一括的な不特定共通代示の場合にも、この条件を無視すべきだと主張しており、その理由として次のように述べている<sup>14)</sup>。オッカムが「一つの単称命題から元の命題への上昇が可能か、否か」という条件を挙げているのは、この『大論理学』Summa Logicae 第一部第七十章の箇所のみであり、『大論理学』の第二部、第三部、オッカムの他の著作 Elementarium Logicae にはでてこない。それゆえ、この条件は、オッカムの代示の理論において本質的なものではなく、何ら重要な役割を果たしていない。古い時代の考えの名残りが『大論理学』第一部第七十章にでてしていると解すべきである。従って、この条件を除去する。

然し、この Priest と Read の主張に対して、私は二つの点から反論する。先づ第一に、「一つの単称命題から元の命題への上昇が可能か、否か」という条件は、Priest と Read の主張するように『大論理学』第一部第七十章にのみでてくるのではない。同じ『大論理学』第一部第七十五章<sup>15)</sup>にもでてくるし、オッカムの他の二つの著作 *Elementarium Logicae*, *Tractatus Logicae Minor* にも、一括的な不特定共通代示と配分周延的な不特定共通代示を区分する条件としてでてくる<sup>16)</sup>。この点で、Priest と Read は誤解している。更にオッカムと同時代のパーレーにおいても、はっきりと、「一つの単称命題から元の命題への上昇が可能である」ということが、一括的な不特定共通代示の成立する条件の一つに挙げられている<sup>17)</sup>。それゆえ、この条件を無視することはできない。

第二に、この条件がオッカムの個体代示において本質的なものではないという Priest と Read の主張に対して、「オッカムが個体代示を三つに分類した際に、彼は如何なる思考の仕方をしたのか」という観点から、私は反論する。すなわち、テキスト(『大論理学』第一部第七十章、その他の著作)の記述の順序からして、個体代示を三つに分類した際に、オッカムは次のような思考をしたことは明らかである<sup>18)</sup>。

〈第一段階〉 彼は先ず特定代示が成立する条件として、

①選言命題を用いて下降できる DD

②一つの単称命題から元の命題への上昇が可能である A

を挙げ、特定代示とは、この①と②DD&Aが成立する場合であるとした。

〈第二段階〉 次に、彼は「特定代示でないものが、不特定代示である」と述べている<sup>19)</sup>。それゆえ、不特定代示が成立する条件は

~ (DD&A)

~DD∨~A

である<sup>20)</sup>。

〈第三段階〉 それゆえ、不特定代示の一つとして、DD は成立しないが、A は成立するケース~DD&A が考えられるのであり、これが一括的な不特定共通代示の場合である。いま一つには、DD は成立するが、A は成立しないケース DD&~A が考えられるのであり、これが配分周延的な不特定共通代示の場合である。ここからわかるように、「一つの単称命題から元の命題への上昇が可能か、否か」という条件 (A,~A) は、



Priest と Read の解釈と反対に、むしろオッカムの代示の理論のなかで最も基本的、最も本質的な条件なのである。

註

- 1) 元の命題と、下降によって形成された全命題群とが等値であると解釈する論文
  - ① Philotheus Boehner, *Medieval Logic. An Outline of its Development from 1250-1400*, Manchester Univ. Press, 1952, pp. 30-31.
  - ② W.&M. Kneale, *The Development of Logic*, Oxford Univ. Press, London, 1962, p. 268.
  - ③ Loux, Michael J., *Ockham on Generality* (Ockham's Theory of Terms: Part I of the Summa Logicae, translated and introduced), University of Notre Dame Press, Notre Dame and London, 1974.
  - ④ Paul Vincent Spade, "Priority of Analysis and the Predicates of O-Form Sentences", *Franciscan Studies*, 36, annual XIV, 1976, pp. 263-270.
  - ⑤ Graham Priest and Stephen Read, "The Formalization of Ockham's Theory of Supposition", *Mind*, 86 (1977), pp. 109-113.
  - ⑥ Graham Priest and Stephen Read, "Merely Confused Supposition, A Theoretical Advance or a Mere Confusion", *Franciscan Studies*, 40 annual XVIII, 1980, pp. 265-297.
- 2) 詳しい論証は、『中世思想研究』第28号の私の書評 p.169, 及び註(1)で挙げた論文④ Spade, p. 264 を参照。
- 3) 元の命題と、下降によって形成された全命題群とが等値である必要はないと解釈する論文
  - ① Matthews, Gareth B., "Supposition and Quantification in Ockham", *Noûs*, 9 (1973), pp. 13-24.
  - ② John Corcoran and John Swiniarski, "Logical Structures of Ockham's Theory of Supposition", *Franciscan Studies*, 38, annual XVI, 1978, pp. 161-183.
  - ③ Hermann Weidemann, "William of Ockham on Particular Negative Propositions", *Mind*, 88 (1979), pp. 270-275.
  - ④ Alan R. Perreiah, "Supposition Theory, A New Approach", *New Scholasticism*, 60 (1986), pp. 213-231.
- 4) 註(1)で挙げた論文⑥ pp. 268-274.
- 5) Albert of Saxony: *Perutilis Logica* (Venice 1522; reprinted Hildesheim 1974).

- Paul of Venice: *Logica Magna* (Tractatus de Suppositionibus), edited and translated by Alan R. Perreiah, St. Bonaventure, New York, 1971.
- 6) *Opera Philosophica* I, p. 229, lin. 12-15, St. Bonaventure, N. Y. 1974.
- 7) Walter Burleigh: *De suppositionibus*, ed. Stephen F. Brown, *Franciscan Studies*, 32 (1972), p. 59.
- 8) 註(3)で挙げた論文④ Alan R. Perreiah pp. 217-218.
- 9) *Opera Philosophica* I, p. 211, lin. 62-68.
- 10) 註(1)で挙げた論文③ Loux p. 27, 論文⑥ Priest と Read pp. 271-274.
- 11) オッカムが例として挙げている全称肯定命題の主語の場合には確かに、「すべての人間は動物である」という命題と、「この人間は動物である、且つあの人間は動物である、且つ……」という連言の命題群は等値になり、相互に含意可能である。それゆえ、Loux のような解釈が生じてくるのである。然し『中世思想研究』第28号の私の書評 p. 170 で述べたごとく、だからと言って、名辞が配分周延的な不特定共通代示を持つための条件のなかに等値であることが含まれるわけではない、というのが Corcoran と Swiniarski, 及び筆者の解釈である。
- 12) 註(5)で挙げた Paul of Venice のテキスト III, 11a, p. 94 *Suppositio confusa distributiva mobilis est significatio termini communis, sub quo contingit descensus fieri ad omnia eius singularia copulativa cum debito medio et econtra cum eodem medio. Sequitur enim "Hoc animal currit et hoc animal currit et sic de singulis, et ista sunt omnia animalia; ergo omne animal currit."* Et econtra sequitur cum eadem minori, quae dicitur constantia singularium, ut "Omne animal currit et ista sunt omnia animalia; ergo hoc animal currit et sic de singulis".
- 13) オッカムは、三つの論理学の著作 *Summa Logicae*, *Elementarium Logicae*, *Tractatus Logicae Minor* のいずれにおいても、この基本的な考えを述べている。*Summa Logicae*, I, c. 70, *Opera Philosophica* I, p. 210, lin. 21-30. *Elementarium Logicae*, ed. E. Buytaert, *Franciscan Studies*, 25 (1965), p. 209. *Tractatus Logicae Minor*, ed. E. Buytaert, *Franciscan Studies*, 24 (1964), p. 67.
- 14) 註(1)で挙げた論文⑥ pp. 272-274.
- 15) *Opera Philosophica* I, p. 231, lin. 24-26.
- 16) 註(13)で挙げたオッカムのテキスト  
*Elementarium Logicae*, Liber III, B, 2, De suppositione personali speciatim, p. 210 *Suppositio confusa. Suppositio confusa est quando non contingit descendere ad singularia seu nomina significatorum sive pronomina demonstrantia significata per disiunctivam, nulla variatione facta circa aliud extremum; et non con-*

*tingit semper ascendere [a nomine unius significati ad terminum communem], quod dico propter suppositionem confusam tantum, in qua bene contingit ascendere a nomine unius significati ad terminum communem.*

*Tractatus Logicae Minor*, III, p. 68 *Suppositio confusa tantum est quando non contingit descendere ad singularia nec per disiunctivam nec per copulativam, licet conveniat ascendere de singulari quocumque.....*

17) Walter Burleigh: *De Puritate Artis Logicae Tractatus Longior*, ed. P. Boehner, Franciscan Institute Publications, St. Bonaventure, New York, 1955, prima pars, c. IV, p. 21.

18) 註(3)で挙げた論文②Corcoran—Swiniarski, pp. 173—174 を参照。

19) *Summa Logicae*, I, c. 70, *Opera Philosophica* I, p. 211, lin. 41.

20) 註(13)で挙げたオッカムのテキスト

*Tractatus Logicae Minor*, III, p. 67 *Est itaque suppositio confusa quando non contingit descendere per disiunctivam ad singularia vel non contingit ab uno solo singulari ascendere ad terminum communem.*